

地域住民による支え合いの拠点（居場所）づくり ～北翔大学の取り組みを通して～

Making places for mutual support by local resident
～ Through the practice of Hokusho University ～

岩 本 希 ¹⁾	尾 形 良 子 ¹⁾	吉 田 修 大 ¹⁾
Nozomi IWAMOTO	Ryoko OGATA	Takehiro YOSHIDA
黒 澤 直 子 ¹⁾	梶 晴 美 ¹⁾	本 間 美 幸 ¹⁾
Naoko KUROSAWA	Harumi KAJI	Miyuki HOMMA
八 巻 貴 穂 ¹⁾	佐 藤 郁 子 ¹⁾	佐 々 木 浩 子 ²⁾
Takaho YAMAKI	Ikuko SATO	Hiroko SASAKI

はじめに

近年、日本では超高齢社会の到来とともに地域のつながりの希薄化や子育て基盤の脆弱化が課題とされている。「平成29年版高齢社会白書」（内閣府）によれば、平成28年10月1日現在の我が国の高齢化率は27.3%と上昇の一途をたどる一方、総人口は減少過程に入っている。核家族化の背景もあり、「家族が共に過ごす時間が減少し、家族の維持よりも個人の自由が尊重される」社会になっている（原子2017）。

このような状況下、厚生労働省¹⁾は高齢者福祉分野では地域包括ケアの推進、児童福祉分野、とりわけ子育て支援に関しては地域での子育ての重視、また障害者福祉分野では施設から地域へと地域福祉づくりに取り組んでいることを述べている。加えて、複雑化する福

祉ニーズへの対応が困難となりつつある社会において、地域全体で支える力を再構築することが求められていることも指摘している。

平成29年に厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会対策本部は「『地域共生社会』の実現に向けて（当面の改革工程）」をまとめた。分野ごとに縦割りの福祉サービスによる支援の現状、社会的孤立や制度の狭間に対する支援の必要性について指摘し、“縦割り”の限界を克服する必要性、“つながり”の再構築の必要性について述べている。また、厚生労働省によれば「地域共生社会」とは、「制度・分野ごとの縦割りや支え手・受け手という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すも

1) 北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科

2) 北翔大学教育文化学部教育学科

のである」と説明されている。

このような現状を背景として、現在では日本各地で「地域の居場所づくり」が注目され、子ども食堂や地域食堂もその機能を有し全国各地に広がりを見せている。食事という行為は誰もが行う営みであり、居場所づくりの中でも食事（食堂）を介した取り組みは比較的地域住民の参加を得やすい。

北翔大学研究プロジェクト「支え合いの拠点（地域）の居場所づくりのための研究・実践グループ」（以下、本プロジェクト）は、江別市内における地域の居場所づくりの一環として「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」に取り組み、大学祭でのプレ実施（ワンコイン食堂）を経て実際の地域での食堂事業・居場所づくりを進めている。

本稿は、平成29年9月30日に開催された本学の大学祭において実施した、ワンコイン食堂及び同時に実施したケアラズカフェについて報告し、地域の居場所づくりについて今後の展望と課題を検討することを目的としている。

本プロジェクトの目的及び背景

本プロジェクトは、本学が所在する北海道江別市において地域住民主体の支え合いの拠点（居場所）を創ることを目的とし、平成29年4月に江別市大学連携調査研究事業の助成を受け、取り組みを開始した。地域の居場所づくりを江別市内全域に広げていくことを今後の目標としており、江別市地域福祉計画の基本理念である「お互いさまみんなで支えあう地域づくり」を現実化することが可能であると考ええる。

平成27年3月にまとめられた「第3期江別

市地域福祉計画」²において、“近所との付き合いがほとんどない”，“近所との付き合いに満足していない・あまり満足していない”と答えた一人暮らしの住民が19.1%を占めていることが明らかにされている。それ以外の世帯形態の住民については6～9%台であることから、とくに一人暮らしの住民の近所づきあい満足度が低い数値であることが伺える。また、同計画に掲げられている基本目標3「地域福祉を推進する環境づくり」には、基本施策6として「支えあい意識醸成と環境づくり」が挙げられており、“地域のサロン・集いの場づくり”を促進する内容が盛り込まれている。

本プロジェクトによる居場所づくりの取り組みは、同計画の上述した部分に貢献できるものと考えられる。また、本取り組みがモデルケースとなり、江別市内の数か所に地域の居場所づくりが進められることも期待している。各地域での居場所づくりに応用できるよう、地域の居場所がつくられるプロセスを整理していくことも重要な課題である。

本プロジェクトの実践経過

地域の居場所づくりを展開するにあたり、平成29年5月より打ち合わせを開始した。居場所づくりのきっかけとして、子ども食堂・地域食堂の開催を決定し、同時に平成29年度北翔祭（本学大学祭）の企画としての「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」開催に向けても準備を進めた。打ち合わせは週一度実施し、大学祭における食堂事業の内容、提供するメニュー、当日までの準備等について検討を重ねた。

同年8月から9月にかけて江別市内各関係

機関（江別市健康福祉部，江別市社会福祉協議会，江別市民生委員児童委員連絡協議会，高齢者クラブ，江別市内各地域包括支援センター）に対し，地域の居場所づくりに向けた地域情報の聞き取りや協力依頼，大学祭企画の周知を行った。

また9月中旬頃から，大学祭企画開催後も継続して北海道内，道外の居場所づくり及び子ども食堂・地域食堂などを実施している先進地域の取り組みを視察した。

10月頃から江別市内での地域の居場所づくり開催スケジュールを検討し，同時に当面の開催場所とする地域及び会場探しを行った。

会場探しに当たり江別市内を实地踏査し，住宅街や学校，スーパーなどから比較的徒歩圏内に位置している野幌公会堂³を候補とした（野幌地区）。食堂事業初回の開催時期については，天候による参加意欲の妨げを極力避けるため，12月から開始することとした。

11月には居場所づくりの先進地域である東京都文京区から講師を招き研修会を開催，江別市民並びに関係各所から多くの参加があった。なお，本稿は大学祭における実践報告のため研修会に関する内容は割愛する。

12月には初回（12月20日（水））開催に当たり運営側として参加する学生向けの説明会を実施した。本取り組みは地域の居場所づくりを通して地域住民との交流を図ることができ，学生にとっても貴重な学びの機会となっている。居場所づくりとしての食堂事業は今後も毎月1回，第3水曜日に開催していく見通しである。徐々に地域住民にも運営に参加してもらえるよう働きかけ，将来的には住民主体の活動として進めていけるよう取り組みを継続していきたい。

「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」 「ケアラズカフェ@北翔大学」の目的

平成29年9月30日に行われた本学大学祭（北翔祭）の企画として「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」を開催した。また，当日は前年度の大学祭企画である「ケアラズカフェ@北翔大学」も同時開催した。

食堂事業を実施するためには，大人数分の食事を用意することが必要である。本大学祭での食堂開催は，地域で食堂事業を行う際に起こりうるリスクを最小限に留めるためのブレ実施としての要素を含んでいる。大学祭企画においても，地域での食堂事業同様に“いっしょにご飯を食べると仲良くなれる”をテーマに広報を行った。食事という目的のみならず，同時開催した「ケアラズカフェ@北翔大学」の会場では参加者に自由に過ごしてもらえよう広く開放的な空間と飲み物を提供した。カフェでは本学の学生が住民の方と交流を図ることも目的の一つとした。なお前年度開催の同カフェ企画では，介護を行っている当事者からの発題や参加者同士の自己紹介などをプログラム化したが，今回は地域の居場所に大切な“誰でも自由に”過ごしてもらえることも狙いとし，プログラムは用意せずに開催した。

大学祭企画開催に向けた準備

開催に当たり，本プロジェクトにおける打ち合わせを平成29年5月から開始し，夏季休業中などを除きおおよそ週に一度話し合いの機会を設けた。食堂及びカフェの対象者に制限はなく，誰でも気軽に参加してもらえる場

とした。

食堂メニューは「そばろ丼」と「スープ」のセットで1食100円とし、食堂利用者のカフェ利用料は無料とした。カフェのみ利用者からは100円を徴収することとし、これは前年度の利用率（参加費）を参考にしている。

メニューの「そばろ丼」は、子どもから大人まで馴染みのある料理であろうこと、また調理工程も複雑ではないという理由から選択した。なお、当日の提供食数は限定50食とした。

7月末に学生向けの説明会を実施し、調理担当、受付担当、食堂担当、カフェ担当として学生を割り当てた。大学祭企画において本学健康福祉学科4年生3名、同学科3年生5名の計8名がスタッフとして参加した。また、大学祭前日の準備日も同学生らを招集し、会場設営、会場内の装飾品等も学生らで手掛けた。会場設営終了後、本学を拠点とし東西南北4グループに分かれ近隣住民宅へチラシをポスティングした。

大学祭企画の実践

開催日はいずれも平成29年9月30日（土）であり、開催時間は異なる。会場は本学PAL 5階の各フロアを使用した。当日は来



写真1：事前準備の様子

場者に受付で利用目的（食堂またはカフェ）を確認し、適宜料金を徴収し開催会場へと案内した。

1) 「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」

会場：PAL 5階 Central CAFÉ

（配膳準備：エグゼクティブルーム）

時間：11時30分～13時30分

（完売次第終了）

料金：100円

当日の調理に当たり、食材等の買い出しは前日の準備日に行い、当日の調理は本学調理実習室にて10時30分より行った。

食堂の会場では営業開始前から数名のお客様が来場した。11時30分の営業開始とともに子ども連れの家族を始めとし地域住民の方々も多く来られた。予定提供数の50食は13時頃に完売し、営業終了時間を繰り上げたがその後も6組の来客があるなど、食堂は盛況のうちに終了した。

2) 「ケアラズカフェ@北翔大学」

会場：PAL 5階 ボードルーム

時間：10時30分～16時00分

料金：100円

（食堂利用者は無料）

カフェでは数種類の飲み物を用意し、学生が来場者に声をかけ飲み物を提供した。各テーブルに用意した菓子も召し上がってもらいながら、来場者らは自由に過ごされた。食堂終了後は配膳を担当していた学生らもカフェで来場者に声をかけ、地域住民や他大学の学生等と交流を図った。今回は前年度と異なり

プログラムを用意せず、通常のカフェのように利用してもらったが、一部の利用者から「ケアラズカフェとは何ですか？」という問い合わせもあった。通常のカフェのように利用しやすい雰囲気の中に“ケアラズカフェ”という名称やその要素を含むことで、一般の方がケアラズカフェに関心を寄せるきっかけとなったことが考えられる。

大学祭企画の実践を終えて

本節では、大学祭企画の内「子ども食堂・地域食堂×北翔大学」に焦点化して取り組みを振り返りたい。

今回の大学祭企画における食堂事業では、50食を終了予定時刻よりも早く完売することができた。これには、大学祭への来場者が食事をするために本食堂へ足を運んだという背景もあり、純粋に子ども食堂や地域食堂を利用して他者と交流を図ることを目的として来場した者ばかりではないことは否めない。同じテーブルで食事の時間を共にしても、他人同士が自然と交流を図ることは難しく、スタッフなどが意図的なかわりをするのが重要であると考えられる。

食事という営みが人の集まるきっかけとな

ることは確実である。しかし目的が“食事”のみであれば、それを終えると退室してしまい、かつ今回の大学祭企画のように単発的なものであれば関係の構築は困難である。スタッフとして参加した学生8名に割り当てた役割の中に、来場者同士の交流を促すファシリテーターとしての役割が必要であったと考えられる。

今後継続的に実施していく地域での居場所づくりについても同様に、住民同士の交流のきっかけとなる仕掛けや仲介役となるスタッフを用意することは重要課題の一つであると言える。

また大学祭企画は北海道新聞からの取材を受け、同年10月17日の朝刊に開催後の記事が掲載された。このようなメディア等の広報ツールは、より多くの住民へ情報を発信するために非常に有効である。今回の大学祭企画における広報は、今後の“居場所づくり”についての関係各所への説明及び協力要請の折に行った開催の案内、大学祭前日の近隣住民宅へのポスティング、SNS（Facebook）での発信のみであった。今後は、新聞のようなメディア等による開催前の案内なども活用すべく、より幅広く関係各所への周知協力を依頼する必要があると考える。



写真2：当日の様子①



写真3：当日の様子②

地域での実践に向けた課題と展望

今回の大学祭企画による開催は、今後の江別市内における居場所づくりの実践に当たり“食堂（食事の提供）”に焦点化すると非常に有意義なプレ実施となった。大学祭企画としての単発開催であり本学教員と学生らで運営が可能であったこと、調理実習室を含め本学の整った設備が使用できたことなども、大きな問題が生じずに開催できた所以である。

しかし今後、地域の資源を活用し継続的な活動を行っていく本プロジェクトの取り組みでは、大学祭企画では生じなかったさまざまな課題が生じることが考えられる。本節において、今後生じ得る課題について検討したい。

1) 担い手

江別市内に複数の“地域の居場所”をつくるにあたり、主体となる担い手をいかに確保するかは非常に重要な課題である。

居場所づくりや子ども食堂・地域食堂事業の先進地域を視察した際にも、「担い手をどのように確保するかは最重要課題」と述べている団体が多かった。

居場所づくりへの関心もさることながら、参加者同士の波長合わせも必要な要素である。先述の通り、他人同士が関係を構築するためには“きっかけ”やファシリテーターの存在が必要である。活動開始時は運営の中心スタッフがその役割を担うことが予想されるが、徐々に参加者に役割意識が形成され、参加者も運営の担い手となることが望ましい。

つまり、従来の援助関係のように“援助者と被援助者”という固定化された関係ではなく、誰もが支え手にもなりまた受け手にもな

る循環が自然発生的に形成される関わりや仕組みが必要である。その中で、参加者同士の調和を保ちながら継続的に運営に携わることのできる人材を確保することが求められる。

2) 開催場所

継続的に活動していくためには、会場となる場所の確保は必須である。視察先では、空き家や閉店後の空き店舗などの再利用、コミュニティスペースの活用などにより居場所事業や食堂事業を実施している。公民館などの公共スペースは、地域のサークルなどが定期的に利用している場合が多く、新規利用希望者にとっては利用しにくい側面は否めない。

定期的に同一の場所で開催することは地域住民及び関係機関への広報の面で有効である。

また運営上さまざまな課題が起こり得る中で、当面継続的に利用できることが確約されている場所があることは、円滑に活動を進めていくにあたり重要な点である。

3) 活動資金

活動するための経費として、会場にかかる費用のほか、食材費が大きな割合を占める。食材は、地元の農家や企業などからの寄付で賄っている団体も少なくないが、そのような協力を得るためには活動の広報を行い広く賛同を得ることが必要となる。

また食材に限らず資金についても寄付を募ることや、各種補助金などの外部資金を調達することで継続的な活動を可能にする仕組みを作ることも望ましい。そのためには、国や自治体が現状を把握し、活動への理解が成されなければならない。地域の居場所の存在が住民の生活にとってどのような影響を与え、

今後社会にとっていかに重要な役割を果たすかを明らかにし、各関係機関を始め社会全体に働きかけていくことが必要である。

4) “誰でも”利用できる困難さ

地域の居場所の多くはその対象を限定していない。「子ども食堂」として運営している事業は、その対象を“子ども”“子育て中の親”などと限定している場合もあるが、あくまでも原則的な決まり事として運営している場合が多い。

“誰でも気軽に立ち寄れる”ことが地域の居場所には求められる考え方であるが、“誰でも”立ち寄れる場所が全ての者にとって“気軽に立ち寄れる”場所とは限らない。対象を限定しないために、「あの人がいるかもしれないから行かない」という警戒心から足が遠のくケースもある。

本来であれば、年齢などの垣根を越えた交流が図られ住民同士のつながりが生まれ、「お互いさま」で助け合える関係が形成されていくことが地域にとって望ましい循環であると考えられる。しかし、意図的に対象を限定した集団内での関係形成が必要な場合や、住民がそのような場を求めている場合もあり、状況に応じた的確な判断が要される。

その場に起きていること、住民同士の関係などを見極め必要な軌道修正や今後の見通しを立てられるような人材を地域や居場所づくりのコーディネーターとして配置することも今後の課題として重要であると考ええる。

まとめ

近年の日本における高齢化、核家族化、未

婚・晩婚化などを背景とした住民同士のつながりの希薄化や孤立化という現状は、今後も継続的に検討される課題である。本稿でも取り上げてきた地域の居場所づくりは、これらの課題を解決する方法として注目され、地域共生社会の構築にも貢献できる取り組みの一つである。

居場所は、場所があれば必ず居場所になるというものではない。設備が充実した施設や内容が充実した企画があることは、人が集まるきっかけの一つにはなる。しかし、重要なのは“どこに”集うかではなく、“誰と”集うかという、人同士のつながりである。また活動及び集団の規模や活動方針等も住民の意向に沿いその集団にとって適切なものであることが望ましい。

坂倉（2010）は「小さなグループの活動が網の目のように広がることは、ソーシャル・キャピタルの蓄積として地域コミュニティの力の向上につながる」と述べており、限られた資源の中でも、小集団による活動が広がり、徐々に拡大・分散することで新たな活動への発展や地域福祉の推進を図ることができると考えられる。

本プロジェクトにおける活動も、徐々に江別市内全域に分散することを目指して取り組んでいる。住民同士のつながり形成、地域に貢献できる学生の養成、学びの場としても“居場所づくり”が成す意義は大きい。今後は、現在活動を展開している地区での取り組みを一つの事例として、他の地域でも応用できるよう居場所づくりのプロセスを整理していく。その中で生じる課題を、住民や各関係機関等と協同して解決していける関係を築き、地域福祉の発展に貢献できるよう継続的

に検討、取り組みを進めていきたい。

謝 辞

本プロジェクトの活動において、ご協力いただいている各関係機関及び住民の方々、並びに視察訪問をお受入れいただいた各団体の皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1 厚生労働省 新たな福祉サービスのシステム等のあり方検討プロジェクトチーム
- 2 江別市地域福祉計画策定委員会による市民アンケート結果より(平成26年10月実施)
- 3 野幌代々木町

参考・引用文献

厚生労働省：「誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現—新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン—」(平成27年9月17日)

〈<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/bijon.pdf>〉

厚生労働省：「「地域共生社会」の実現に向けて(当面の改革工程)」(平成29年2月7日)

〈<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000150632.pdf>〉

内閣府経済社会総合研究所編「コミュニティ機能再生とソーシャルキャピタルに関する研究調査報告書」(平成17年8月)

〈<http://www.esri.go.jp/jp/prj/hou/hou015/hou15.pdf>〉

内閣府「平成29年版高齢社会白書」

〈<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/index.html>〉

文京区社会福祉協議会：「平成28年度 地域福祉コーディネーター 生活支援コーディネーター活動報告」

北海道江別市：「第3期江別市地域福祉計画」(平成27年3月)

原子 純(2017)「子どもの生活と地域の居場所」『尚美学園大学総合政策研究紀要第29号』(尚美学園大学), 65-76.

坂倉 杏介(2010)「地域の居場所からのコミュニティづくり：芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成を事例に」『慶應義塾大学日吉紀要』(慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会) 63-78.

吉田修大 他(2017)「ケアラーへのサポートを实践するコミュニティカフェ～ケアラーズカフェ@北翔大学の取り組みを通じて～」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第8号』, 207-215.